

# 星々は夢を見ない

——オーギュスト・ブランキに関する覚え書き——

鈴木雅雄

## 1. 牡牛の城の老人

パリ・コミュニケーション勃発の前日に逮捕されて以来カオールカオールの監獄に約二ヶ月収容されていたブランキが、特別仕立ての列車に乗せられたのが五月二日朝、トゥール、ナント、レンヌをへてドーヴァー海峡を臨むブルターニュ地方モルレーの街に到着したのは二三日夜一時であるとする<sup>1</sup>。このあと護送車に乗り換えた老革命家が海岸に着いたのが深夜一時ごろ、船が霧のなかを目的地に着くまでさらに二時間以上かかったとすれば、ブランキがトローロー要塞に到着したのはすでに早朝だったことになる。このときコミュニケーションはまさに断末魔の叫びを上げていたはずだが、ブランキの影響力が当局にとって大きな脅威であり続けたことは疑いがなく、一月一二日彼がヴェルサイユに移送されるまで、沖合いには常に警戒の軍艦一隻が停泊していたという。かつてイギリスの侵入を防ぐために建造され、一七世紀からは国事犯用の監獄として用いられるようになった

トローロー要塞（＝牡牛の城）で、この間「老人」はただ一人の囚人であり、これまで彼が経験してきた多くの監獄のどれと比べても劣悪としか表現しようのない環境で、すでに六六才になる老革命家の健康は否応なく悪化していった。湿気と騒音、質の悪い食事に加え、窓から海を見ることが禁じられている。だがこの環境のなかで現実的な政治活動から切り離されたブランキが、半世紀以上のちにベンヤミンを驚愕させることになる、彼の著作全体のなかでもっとも不可思議なテクスト『天体による永遠』を執筆したことは、今では比較的よく知られているだろう。

ブランキにおける天文学への関心が決して新しいものでないことも、むしろ常識に属する。一八四一年にモンサンミシエルの監獄で彼が書きしるしたメモのなかには、宇宙が無限である以上「地球」も無数に存在するはずだという『永遠』の中心命題がすでに発見できる。一八五五年、ベルリールの監獄から友人に宛てて書かれた手紙には、天体の運動を考えるための道具として軌道を表現する球を五つほど送ってほしいという依頼が含まれるし、きわめて詩的に語

られた一八五七年六月の隕石落下目撃談も、ブランキに関心を持つ人々の多くに記憶されているはずだ。トーロー要塞監禁に際しても、

完全に断たれていた外部との接触がいくら可能になった六月、妹アントワーヌ夫人宛の書簡でブランキは、数冊の天文学書を送付してくれるように依頼する。それはラプラスの『宇宙体系の解説』と

『確率に関する哲学的試論』、ジャック・バビネ『観測学とその実践的应用に関する研究および読解』であり、ラプラスのテーゼが『永遠』のなかで、乗り越えるべき対象としてつねに参照されていることは周知の通りだが、最新の科学的知見を一般向けに解説した読み物として普及していたバビネの『研究および読解』のシリーズについても、彼が特に必要だという三巻と七巻の目次に目を向けるなら、『永遠』との関係は一目瞭然である。三巻には「世界の複数性について」という章が含まれているが、そこでは一九世紀最大の地球外生命体論争であるヒューエルとブルーワーの論争が解説されるとともに、居住世界の複数性というテーゼが擁護されているし、七巻の各章は「ラプラスの宇宙生成論」、「一八六一年の大彗星」、「天文学と気象学」などと題されている。同じくアントワーヌ夫人に宛てられた七月三日付けの手紙には、資料が到着しないために仕事が進まないことへの苦情が述べられており、『永遠』執筆の作業が六月末ごろからはじまっていたという大方の想像にも根拠があるといえるだろう。いずれにしてもこの強制された孤独のなかで、七月王制以来すべての政体によって投獄されてきた一九世紀フランス最大の革命家

が、その活動の傍らで密かに練り上げていた宇宙論は、一冊の書物の形を取るようになる。

しかし私たちは、それがこうした極限状況で書かれたテキストであるとか、進行しつつある裁判を多少とも有利に導こうという計算——結局それはあてが外れてしまい、刊行のほんの数日前にはすでに終身刑の判決が下っていたのだが——とも無関係ではないといった事情を括弧に入れて、同時代の科学に関する思弁としての『永遠』を考えてみよう。この書物で強い印象を与えるのはもちろん何にもまして、宇宙には私たちの一人一人とまったく同じ人間が無数に存在し、これまでなされたすべてはこれ以後も無限回繰り返されるのだとする結論に違いない。だが同じほどに私たちを戸惑わせるのは、この限りなく宿命論的な結論が、それに先立つ彗星と黄道光、および天体の誕生をめぐる一見正反対の議論となぜか矛盾することなしに同居しているという事実である。

## 2. 一九世紀的宇宙観の転倒

ラプラスは彗星を、太陽系の起源である巨大なガス球と同質のものと考えるが、彗星はどのような高い熱を持たないはずだし、そればかりか地球の傍らを通過してもほとんど影響を与えることのない空虚な存在なのであって、つまりは恒星や惑星とはなんの共通点も持たないまったく別の種類の物質である。——『永遠』の主要な論

点の第一点である彗星についての議論はこのように要約できる。「彗星はエーテルでも気体でも液体でも固体でもない。天体を構成しているどんなものとも似ていない。それは定義不可能な物質であり、既知の物質のいかなる特性も有していないように見える」<sup>2</sup>。地球の引力に捉えられて残留した彗星の塵が太陽光を受けて光ったものがいわゆる黄道光であるという主張の可否は問わないとして、これが人間には認識不可能なものの存在を認める議論であることは間違いない。地球上で観察できる事物についての科学的知識を延長しても捉えられない絶対的な外部が存在するのであり、しかもそれは遠い宇宙の彼方ではなく、しばしば私たちの傍らを通り過ぎていく不可思議な天体の姿を取って現れる。ブランキにとって彗星とは、私たちの語りうる論理と必然性の埒外の存在である。

第二点は太陽系の起源という問題だが、ここでもブランキは、数学的必然性と調和の世界であるラプラスの宇宙に対しその必然性の外で起こる大異変を対置しようとする。いわゆるカント・ラプラスの星雲説がそれ自体としては完成度の高いモデルであることを、多くの同時代人とともにブランキもまた認めるのであるが、回転しながら太陽系を生み出すきわめて高温の巨大なガス球というラプラスの仮定では、その高温がどこから来るのか説明されておらず、これを説明するためには天体どうし、あるいは太陽系どうしの衝突が原因だと考えるより他にないと、彼はいう。天体どうしの結婚と出産といった表現がいくらかフリーエ的な印象を与えるとしても、ブラン

キの宇宙観が全体を統括する超越的必然性などと無縁のものであることは疑いがない。事実彼は、読み手がこんなふうに抗議するだろうという。「重力の法則性に対して、まことに奇妙な否認を行う永続的な動乱、それを天空の彼方に想定する権利を、あなたはどこで手に入れたのか。[...] 人類はいつも、天体の運行の堂々たる荘厳さをたたえてきた。かくも美しい秩序を、あなたは永久の混乱で置き換えようとしている」<sup>3</sup>。美しい楕円軌道を描く星々の秩序でなく、そこに介入する動乱。それだけが生まれ変わりを可能にするのであり、一つのシステム——たとえば太陽系——にとって決定的なものはあくまで「外」から来るもの、偶然でしかありえないと、ブランキは考えるのである。

カント・ラプラス的な必然性の宇宙にブランキは偶然性のそれを対置する。では『永遠』の論点のうち第三点、すべては反復でしかないというきわめて宿命論的な見かけを持ったその主張は、この偶然性の立場といかにして両立しうるだろうか。

周知の通り、ブランキの議論の前提は天体の構成物質に関するスペクトル分析である。キルヒホッフによって分光学の基礎が築かれたのが一八五〇年代終わり、ハギンズが太陽同様の構成元素を他の恒星に認めたのが一八六四年だとすると、それは七一年という時点ではまだかなり新しい科学上のトピックだったはずだ。どんなに離れた宇宙からやってくる光も、そこに未知の物質が存在することを示唆しない。無限の宇宙に点在する無限個の天体が有限の元素によ

ていた遠さと近さの反転をふたたび見出しているのである。<sup>⑤</sup>

って構成されているならば、元素の組み合わせによって作られるものもやがては数が尽きてしまい、あとは反復されるしかない。だからこの地球上に存在するすべては宇宙のどこかにそのままの姿で反復されているはずであり、そこでなされるすべてはすでに無限回なされ、今もどこかでなされつつあり、また未来においても無限回なされるのであるという、まさに驚くべき論理。天体を構成する要素が有限であるならば、どこかに地球に似た惑星が存在するかもしれないと推測するのは自然なことかもしれないが、だとすると宇宙にはコミュニケーション可能な友人がいるかもしれないと期待するのはなく、宇宙はそれほどにも貧しいのだと結論する感性は、やはり常識とはかけ離れている。「人々は他の天体上に、地球上のそれとは似ても似つかぬ空想的な状況や生物が存在すると考えたが、それは錯誤であつた」<sup>④</sup>。すべては似たようなものであるという

「幻滅（脱幻想）」のデイスクールが、世界のどこかには私たちの期待に应运てくれるものが存在するかもしれないという「幻想」のデイスクールが生み出したよりも、はるかに極端で常軌を逸した結論を引き出してしまう。ブランキは、自分が属する時代の夢に対してもっとも徹底した批判を行うことで、夢よりも異常なヴィジョンを作り出してしまふのであり、ましてすでに述べた通り、遠い宇宙の果てに無限の単調さを見出すこの思索者が、同時に宇宙での隣人というべき彗星を絶対に理解不可能な存在とみなしていたのだとすれば、ここでもまた私たちは、ちょうどシャルル・クロが差し出し

もちろんブランキの論理を反駁することは困難ではない。同時代の複数の評者がそのことには容易に気づいたが、なかでも典型的なのはカミーユ・フラマリオン<sup>⑥</sup>の評価だろう。世界が有限個の要素からできているとしても、いやたとえたった一種類の要素からできているとしても、そこから作られるものが有限個であるとはいえない——フラマリオンの批判はそう要約できるが、これは正当な指摘だといわざるをえない。要素の有限性とそこから作られるものの有限性とはまったく別の問題である。たしかに『永遠』にはこうした批判を予想したような記述がないわけではなく、恒星系の生成プロセスからして高密度の部分が中心に集まりやすいなど、すべての太陽系は似たものになる傾向があるといった説明がなされているのだが、ブランキの論理が結局は科学的というより修辭的なものであるというジャック・ランシエールの意見は認めるしかないのだろう。だがそうであるにせよ、科学上の新発見にもとづいて構築された地球外生命体についてのデイスクールが（しかも一九世紀後半のフランスにおいて）、「未来予想小説」的な想像力からこれほどにも遠ざかりうるという事実は、私たちを当惑させることをやめはしない。元素の種類が有限であるという単純な事実から帰結するのは、いわば無数のパラレル・ワールドなのだが、それらは私たちの世界に対していかなる異化作用を持つこともなく、いわば文学的想像力に訴えることなしに作り出しうるこの世界のヴァリエーションの一覧表



を構成する。「イギリス人は、彼らの対戦相手がグルーシーのへまを犯さなかつた天体上では、おそらく何回となくワートルローの戦いに敗れている。その勝利はわずかな差だったのである。逆にボナパルトも他の星では、マレンゴの戦いにいつも勝利しているわけではない。あの勝ちはずれだったのだから」。しかもこの可能世界のおのおのは本当らしさにおいて等価である。すべてがすでに無限回実現されており、この先も無限回実現されていく。だとすると、本当のところこれらは「可能世界」ではないのだろう。実現されるか、もしないのではなく、すでにすべてが実現されているからだ。そして運命や宿命を与えることのないこの絶対的な反復こそは、世界を無数の偶然の堆積に変える。あらゆる必然性は価値を剥奪されてしまい、偶然と必然の弁証法的止揚というヘーゲルの二一九世紀的世界観が否定されるのである。この思考の不可思議な位置取りを測定してみなくてはならない。

### 3. 私たちは「あるべき存在」ではない

科学思想史の文脈を考慮するなら、プランキが否定したのはまさに一九世紀が自然のなかに見出したもの、すなわち「歴史」であるといえる。繰り返そう。一九世紀はじめ、自然は永遠不変の秩序であることをやめ「歴史」を持つことになった。星々も、「種」も、生まれ、生き、そして死ぬのである。もちろんプランキの宇宙はラプ

ラス的秩序の否定のうえになりたっている。それは永遠の動乱である。しかしここには、そうした無秩序のなかに投げ出された一つの時代がそれを受け入れるために発明せざるをえなかつた「歴史」のディスクールが、みごとにまで不在だ。「創造」と「審判」にはさまれた物語としての時間が失われたとき、それでも意味と方向性を失うまいとする同時代の知的努力がどのようなものであつたかを確認すること、プランキの特異さはいっそう鮮明になる。

いま一度ヒューエルとブルースターの論争を思い起こしてみよう。直接検証する手段がないためにしばしば宗教論争的な色合いを帯びる一連の論争のなかでも、ここにはその係争点が非常にわかりやすく表現されていた。全能なる神が空間を無駄に使うはずはないから、居住可能な条件があればそこには生物が、さらにおそらくは知的生命体が存在するはずだというブルースターと、他の世界が存在するならキリストの受肉（と彼による贖罪）が実現したのはこの世界でなくてはならないという事実が説明できないと考えるにいたつたヒューエル、という対立がそれである。

プランキの思索の前提をなすフランスでの論争もまた、これとは同じ枠組みで進化したといえる。他ならぬカミーユ・フラマリオンを代表とするフランスの多世界論支持者（ジャン・レイノーやルイ・フィギエ）の場合もまた、その直感の根本が、宇宙には空間の浪費がないはずであるという、いわゆる「充満の原理」であつたことは間違いない。ただしマイケル・J・クロウの大著を一瞥すれ

ばわかるように、一九世紀後半のフランスにおいて、居住世界の複  
 数性というテーゼに対してカトリックの側が示した態度は不思議に  
 もむしろ寛容なものであった。フラマリオンらのこのテーゼの支持者  
 は、地球外生命体の存在をカトリック思想と矛盾するものとして提  
 出するのがむしろ普通だったが、カトリックの論者からはこのテー  
 ゼが必ずしも教義と相反するものではないとする意見が複数出され  
 ており、それはこの時期のローマ教会が保守化傾向を強めていたこ  
 とを考へるならいっそう意外に思える。当時のもっとも影響力の強  
 い天文学者の一人であつたアンジェロ・セッキと法王の友人關係が  
 どこまでこの寛容さを説明できるのか、私たちにはわからない。<sup>(9)</sup> だ  
 がレイノー、フィギエ、フラマリオン等のいわば自然神学的方向性  
 を批判しつつ、居住世界の複数性がキリスト教とは矛盾しないと主  
 張した神学者たちの主張が、ブランキの論理を「図」として浮き上  
 がらせるための「地」を形成していることは事実であらう。

代表的なものとして、世紀末になつて発表されたテオフィル・オ  
 ルトランの『天文学と神学』<sup>(1)</sup>をたどつてみよう。神がこの地（地球）  
 を選び、他ではないここで「受肉」が行われたことは間違いない。  
 たとえ他の天体に居住世界が存在するとしても、それがどのような  
 世界か何一つわかつていない以上、そこから直接に私たちの世界の  
 宗教的相対性が導き出されはしないはずだ。まして万有引力という  
 見えない力がどんなに離れた二つの物体をも結びつけているのだと  
 すれば、すべての天体は一つの全体をなしているのではないか。イ

エスが贖つたのは地球の住人の罪だけでなく、宇宙全体に対してそ  
 うしたと考へる余地もある。そしてこのことは最後の審判の日、キ  
 リストが天使を伴つて天空から舞い降りてくるその日に、明らかに  
 なるのではなからうか。——こうした主張がそもそも、レイノーや  
 フィギエ、フラマリオンらのいわば汎神論的傾向を名指しで批判し  
 ようとする文脈でなされていることを忘れてはならない。問題にな  
 っているのは、宗教者と科学者の対立などではまったくなかつた。  
 あくまで地球を唯一の中心とするか、私たちの世界と同等の価値を  
 持った世界が無数に存在することを認めるのか、それこそが問題で  
 ある。

だからフラマリオンのブランキ批判が、文学的想像力に対する科  
 学の批判ではないことを確認しなくてはならない。誰にもましてフ  
 ラマリオン本人が、宇宙を生命体で満たしたいと考へている。だが  
 彼にとつてその無数の生命体は、あくまで無限の豊かさを証明し、  
 無限の進歩を保証するものでなくてはならなかつた。実は前述の批  
 評記事におけるフラマリオンの書評には、有限の要素から無限の多  
 様性を作ることは可能だというしごく論理的な批判だけでなく、も  
 う一つのより思想的／イデオロギー的な批判、すなわちたとえ他の  
 天体に私たちと寸分たがわぬ生命体が存在したとしても、それは私  
 たちではないのであり、したがつて宇宙には無数の私たち自身が存  
 在するというブランキの主張には意味がないという論点が含まれて  
 いた。つまりカトリックの論者（たとえばオルトラン、あるいはの

ちに触れるグラトリ」と典型的な多世界論者（フラマリオン）に共有されているのは、私たちは唯一の存在、意味と価値を持った存在であり、つまりはあるべき存在だという前提である。へ私たちはあるべき存在であり、だから宇宙で唯一の存在である」という論理と、へ私たちはあるべき存在であり、だから他の天体にも生命が存在するならばそれは私たちに似ている（しかし私たち自身ではない）はずだ」という論理とは、「無限」という脅威に対する防衛反応の二つのパターンにすぎない。それは無限の進歩を条件とする一九世紀的な意味での科学的思考と、無限性を有限性の側に引き戻して意味を与えようとする宗教的思考との、共犯的な対立関係のヴァリエーションの一部なのである。

たった一つの要素からでも無限の多様性は作り出しようという明らかに論理的事実を、そもそもなぜブランキは見落とすことができるのか。それはブランキにおいて、おのおのの主体は唯一の代替不可能なものか、無限に多様な可能性に開かれたものかという問いがはじめから意味を持たないからであり、私たちはどこまでも単調で似たようなものだという発想があらかじめ存在するからだろう。私たちはあるべき存在などではない。ただあるのみである。だから遠い天体上に私たちとまったく同じ生命体が存在するならば、それは私たち自身なのである。こうしていかにも奇妙なことに、ブランキの思考はすでに説明したシャルル・クロのそれと、ここでも前提を共有しているかのように見える。それらはともに時代の夢を共有す

ることがなく、見出された無限の宇宙のなかで私とは誰かという問いを、どこまでも免れた思考であつた。宇宙には意味／方向性があり、それは科学的探究によって知りうる和思考するのが多世界論者であり、私たちの語りうる意味／方向性はあくまでこの地球上に限定されると考えるのがその批判者である。だがブランキは、宇宙からあらゆる意味と方向性を奪ってしまい、しかもそのことによつてもつとも極端な多世界論に達してしまう。すべてはただ偶然に無限回反復されるのみであり、自然に意味などはない。だから、宇宙は無数の私たち自身で満ちているのである。

この暴力的な思考こそは、科学的（自然的）真実と人間的意味とのあいだに必然性の絆を見出そうとする、一九世紀が見た夢のネガである。ドウフォントネーはこの必然性がすでに与えられていると思ひこむことのできる愚かさによつて、クロは科学と文学の差異を感じ取る能力の欠如によつて、彼らの時代の夢を逸脱したとするなら、ブランキはこの必然性にまつわるあらゆる希望と幻影を無化することとそれとは正反対の方向へと時代を逸脱していったのである。ブランキの思索のこの暴力性、それが一九世紀のネガであることを誰よりも鋭く見抜いたのは、間違いなくベンヤミンであつた。天文学者としてのブランキが社会思想家としての彼と正確に同じ人物であることを確認するために、一九三〇年代後半のバリでベンヤミンの書き残した草稿のなかから、私たちの問いにかかわる部分をたどらなくてはならない。

## 4. かくも過激な敗北

宇宙の永遠に照らして考えるとき、たしかに革命に意味を見付けることはできないが、その敵である市民社会のあらゆる希望もまた同じく意味を失う。しかもそれは、私たちが永遠に対しては取るに足りない存在であるからといった慎ましい理由のためではなく、その永遠が私たち自身のコピーで満ち溢れているからだ。「ブランキは市民社会に屈服することになる。だがそのひざまづく力はものすごく、そのために市民社会の玉座が揺れ動きだすほどのものである」<sup>12</sup>。

——ベンヤミンはそうにして、ブランキの最後のメッセージを、革命的高揚と社会秩序とをもろともに無に帰する「地獄のヴィジョン」<sup>13</sup>と見なす。それもまた「ファンタスマゴリー」ではあるとしても、「一九世紀のもろもろのファンタスマゴリーの星座」のなかで、他のあらゆるファンタスマゴリーに対する決定的な批判を発信するようなそれである。私たちにとって重要なのはおそらく、まさしく近代<sup>モダニテ</sup>そのものであるこのファンタスマゴリーが、科学の提示する真実とそれに付与しうる人間的意味との不均衡によって決定されているという視点であろう。少なくともパサージュ論の概要として書かれた文章の末尾で、『永遠』の主要部分をかなり長く引用したあとにベンヤミンがつけ加える次の注釈は、そのように理解できるものだ。

この希望のない諦観こそ、偉大な革命家ブランキの最後の言葉である。世紀は、技術的な新しい潜在性に対して新たな社会秩序をもつて応ずることができなかった。そうであるからこそ、これらのファンタスマゴリーの中心にあり、人を惑わしつつ新と旧を仲介するものの勝利となつたのである。自らのファンタスマゴリーに支配される世界、それは——ボードレールの表現をわれわれが使うならば——近代<sup>モダニテ</sup>である。<sup>14</sup>

発見された事実の意味を与えねばならないがそれを見出すことができないとすれば、事実と意味のあいだに幻想的な必然性を想定するより他にない。近代とはつまり、向かうべき方向性とそれが持ちうる意味を見失っているために、その意味<sup>サンス</sup>／方向性のない無限の空間を無限の進歩の条件であると思ひこもうとする世界であり、そうした夢に支えられた果てしない前方への逃走である。そしてこの巨大な夢の凝集体に閉じこめられて、逃げ出そうとしても出口がないことを知り、その場で周囲の夢以上に強固でより強い腐食の力を持つた別の夢を養った精神、それがブランキだったに違いない。

だがベンヤミンのブランキ像は単に悲観的なものではなく、この「地獄のヴィジョン」はまた、いわば反一九世紀的な革命観の基礎でもあった。『永遠』はたしかに進歩信仰に対する密かな嘲笑ではあるが、だからといってブランキが「自分の政治的信条を裏切ったとはいえない」<sup>15</sup>。彼のモチベーションは前進することではなく、「目下の

不正をなくそうとする決断」である。「怒りから今はびこる不正に反抗して立ち上がるのは、子孫の生活をよくするために立ち上がるのと同じく人間にふさわしいこと」であるが、まさに「ブランキの場合がそうであった。彼は「後で」どうするかについての計画を立てることをいつも拒んでいた」。ベンヤミンがこのようにしてブランキから抽出する革命観は、ブランキの受容史のなかで見ると特別もの珍しいわけではない。だがベンヤミンの明晰さは、宗教と科学の対立と共犯関係を免れるブランキの奇怪な宇宙論が、ユートピア社会主義とマルクス主義の対立と共犯関係を免れていたかもしれない彼の社会思想と、まさに同じ形をしたものであることに気づかせてくれる。

意識に直接現れる不正への抵抗としての革命——それが未来におけるあるべき社会の姿によって正当化されるユートピア社会主義のヴィジョンと対立することは当然として、近代社会を分析することでそこに何らかの法則を見出そうとするマルクス主義のそれともまた対立するヴィジョンであることも明らかだろう。だがこの直接性に立脚した革命行動は、同時に反抗のロマンティックな掲揚とも遠く隔たっている。結果がどうあれ反抗は常に美しいなどと、ブランキは決していわない。眼前にはとにかく承認できない何かがある。この事態をかなう限り効率的なやり方で打ち壊そう。すると無数に枝分かれする可能性の一つが（偶然に）選り取られ、何かが訪れるのだが、その何かが何であるかは「後で」わかるにすぎない。そし

てそうでないと考える人々、未来について積極的に語れると思いいるものたちはみな「狂人」、つまりは白昼夢を見ながら夢見ていることを知らないものたちであろう。

ブランキのヴィジョンがその一見宿命論的な見かけとは反対に、まったく偶然の世界であることをもう一度確認しよう。ある事態は生じることが必然であるが、別のことは起こらないのが必然である、そんな世界ではなく、生じうるすべての事態はすでに起こってしまっており、これからも起こり続ける。そしてだからこそ私たちはその結果がどこにつながるのかを自問することなしに、一つの可能性に賭けることが可能なのである。ここでは無限の反復だけが私たちに、結局はきわめて慎ましい、しかし唯一可能な自由を与えてくれる。自らの行動に意味や必然性を見出そうという希望を捨て去ったときにだけ可能になる革命行動——最近一〇年から二〇年ほどのあいだに書かれたブランキ論のいくつかは、あきらかにベンヤミンの指し示したこの方向に進んでいったように思われる。

## 5. 革命的時間錯誤

ベンヤミンは決してブランキを全面的に肯定したわけではなかった。革命家の抱いた「永劫回帰」の思想が、同時代のあらゆる神話、とりわけ一九世紀そのものとさえいえる「進歩」の神話に対する究極の批判であるとしても、それもまたファンタスマゴリーであるこ

とに変わりはないのであり、まして同じものの回帰とは、およそ神話のなかの神話であるかもしれない。だがある時期以降のブランキ解釈は、むしろ老革命家の宇宙論を、あらゆる神話の外部として描き出そうとしているかに見える。マルクス主義的な歴史モデル自体を一つの神話とみなすことさえ一種の紋切型となった時代を生きたがら、ブランキの思弁を積極的に引き受けようとするものにとつて、彼を「幻滅／脱幻想」の思想家と捉えることは必然であろうし、それはミゲル・アバンスールのように、マルクス主義を矮小化して葬り去ろうとする時流への頑強な抵抗者ですら例外ではない。ベンヤミンの戦略が、ある時代の夢Ⅱ神話に対して過ぎ去ったはずの夢Ⅱ神話を対置することで、そこからの「目覚め」の可能性を考えるものであるとするなら、おそらくは二人のブランキがいることになる。一方には回帰の神話の語り手、他方にはあらゆる幻影の徹底した批判者。だがアバンスールにとつて、ブランキは「別の」神話を作ろうとしたのではなくて、神話というものの自体の外部へと向かい、神話の外で思考する実験を展開した思索者であるように思われる。<sup>16</sup> 素直に考える限り、たしかに未来に奉仕するのではなく怒りの直接性から出発するという態度は、神話なしの革命を考えた革命家というテーゼを許容する余地があるだろう。こうした解釈のなかでもっとも首尾一貫したものとして、アラン・ペッサンの仕事を取り上げることができる。<sup>17</sup>

ペッサンの書物は『民衆の神話』という題名どおり、一九世紀の

革命運動における神話の働きを捉えようとしたものだが、ブランキとブルードンの特権的な位置に置いている。なぜならこの二人が、一九世紀フランスの社会は決定的に対立する二つのクラスに分かれたものだとして診断し、しかもその両陣営の融和を絶対に不可能なものと考えたきわめてまれな思想家であるからだ。ユゴー、ウージェーヌ・シユール、ミシユレ、サンド……一九世紀の代表的「ポピュリスト」ほとんどはたしかに階級間の和解を希求していたし、またマルクス主義的階級史観にしても、ブルジョワジーとプロレタリアが一つの弁証法的なプロセスを作り出し、その対立が当人たちの意図とはかわりなく革命の条件を作り出すと考えるものである以上、階級間に相互的還元の可能性を想定したことには変わりがない。それに反してブランキがプロレタリアという語を用いる場合、それは純粹に政治的レベルの問題であり、社会学的・経済学的ニュアンスを一切含まないこともまた、いく度も論じられてきた。階級間の闘争は力と戦略のみによつて決まるとするブランキの社会観について、だからそれは階級にまつわるあらゆる神話の外部であると考ええるペッサンの評価の逆説性をどう評価すべきかは、ここでは問うまい。いずれにしても私たちは、こうしてブランキの社会観が、あらゆる必然性を無化する『天体による永遠』のディスクールと同じ構造を持つていることを（少なくともそのように解釈する余地のあることを）確認することになる。すべては実現しており、また実現し続けていると考えることで、必然性という概念自体を無効にしてしまう

思想家は、社会にあるべき姿、それがたどるはずのプロセスを一切認めず、すべてを力に還元してしまう革命家と正確に同一の人物である。たしかに一切の社会的神話から隔たっていたせいでブランキは全体主義的ドグマ化から守られていたとまで結論することは、彼の反ユダヤ的な思想がその宇宙論と根を同じくする反ユダヤキリスト教の態度決定に由来することを知っている私たちにとって、やや行き過ぎと見えはする。だが重要なのは、こうして——ベンヤミンの意見に反して？——神話の外への脱出を志向するかに見えるこの奇妙な論理が、ユートピア社会主義とマルクス主義という、正反対のし方で必然性を語る二つのディスクリールのどちらとも対立するという事実、またそれ以上にこの特殊性が、おそらく最終的には自らの時代を生きられない時代錯誤的な精神の生み出したものだという事実である。

進歩史観のおよそもつとも過激な否定であるという意味でブランキの革命観が帯びている現代性が、あくまで少数エリートによる武装蜂起を要求する大革命以来の伝統に根ざしたものであることを、決して忘れてはならない。ブランキにおけるバブーフ主義の影響の大きさを正確に測定することは実際には困難だが、三〇年代初期に形成された革命思想が、生涯にわたり彼の可能性であり限界でもあったことは確かだろう。まして一八八〇年から九〇年にかけての時期に、社会闘争の形態がバリケードを用いた市街戦からストライキへと変貌したことで、少数エリートによる作戦行動のヴィジョンは

急激に現実味を失っていった。オスマンの改造計画がほぼ完成したパリは、もはやブランキが「武装蜂起教範」で夢見たような、敷石をはがしてバリケードを作ることのできる街ではない。<sup>18</sup>一九世紀の歴史に、ロマン主義的革命からマルクス主義的革命への移行、すなわち必然性のディスクリールの勝利の過程として単純化できる側面があるとするなら、ブランキが一九世紀の夢の外に身を持つことができたのは、彼がそもそも彼自身の時代に属することのない「時代錯誤的な」思索者だったからである。だからこの再評価はもともときわめて逆説的なものではあるのだが、しかしまた同時に過去の社会思想をマルクス主義から解放しようとする二〇世紀末の論者にとって、避けがたい紋切型であるのかもしれない。たとえば近年の批評がシャル・フリーエを再評価しようとする際にも、その一見荒唐無稽なユートピア像は、いわば任意の地点から出発する思考実験として捉え返される。トマス・モアからカベールにいたるまでの、統一性を備えた未来のヴィジョンとは正反対に、フリーエのテクストはどこであつてもいいある偶然的地点から出発して世界を思考する試みであると評価されることになるだろう。<sup>19</sup>まるで未来から出発する必然性のディスクリールであるユートピア社会主義と、現在から出発するそれであるマルクス主義との共犯関係に対し、未来から出発する偶然性のディスクリールであるフリーエ思想と、現在から出発するそれであるブランキの戦略が（ブランキ自身はフリーエの書物に對して嘲笑的態度を取っていたにせよ）、はからずも手を結んで対抗



しているかのようだ。だがたとえフーリエとブランキが何らかの前提を共有すると認めざるをえないにしても、スペクトル分析を利用した天体物理学という新しい学問分野によって支えられた思弁だという点に、やはりブランキの特殊性はある。科学を出発点として未来を肯定的に語ることへの抵抗を常数とするフランスの文学的想像力の歴史のなかで例外的な時期とされる<sup>20</sup>一九世紀後半にありながら、「未来予想小説」的なものに根源的な無効性を宣告してしまいう力こそが、ブランキの可能性の中心ではなからうか。科学的真実と文学的想像力は、ここでは決して弁証法的な関係に入りこむことがない。その二つがクロの場合に、緊張関係を取り結ぶことなく端的に一致してしまつたのとは対照的に、ブランキにおいて両者は端的に切り離されている。それはプロレタリアとブルジョアジーの宥和が絶対にあいてないのと同様なのだ。歴史に埋没した医師／作家であるドゥフォントネーと一九世紀フランス最大の革命家を同列に置くことがいかに無謀な比較に見えるとしても、彼ら二人はともに、世紀のなかばをすぎたなお大革命のイデオロギー、あるいはモラルを内在化し続けていたのであり、その時代錯誤的な性格によって彼ら自身の時代の条件を越え出たのである。

## 6. 目的のない革命／レヴォリュション運行

それにしてもなぜこの時間錯誤は、ブランキを過去のイデオロギ

ーの倒錯的な擁護者にしないのだろうか。ここではブランキが、自らの思考をその時代の夢と論理的なデイスクールのなかで対決させる必要を、なぜかもともと感じることにない思索者であつたように見えることを、具体的な例に即して指摘しておくにとどめたい。ブランキは「乗り越え」の欲望を持たず、すべては闘争へと還元される。彼が科学を召喚するのも、自らの思考を未来へと投影し、来るべき時間における矛盾の解消を夢見るためではなかった。科学は人々の夢を物質化するどころではなく、幻影を打ち壊すためにこそ必要であり、だからもつとも厳しく批判されるのは、科学を人間的真実と結びつけようとする宥和的な論者なのである。

一八六五年五月、当時週二回発行されていたブランキ派の機関紙『カンディード』のほぼ毎号に、シユザメル<sup>21</sup>の筆名で掲載された一連の宗教批判文書は、ブランキがキリスト教的宇宙観の何をもつとも忌み嫌っていたかを端的に示している。とりわけ六号、七号、八号に連載された「グラトリ神父。科学と信仰」は示唆的である。

アルフォンス・グラトリは理工科学学校出身という経歴を持つ宗教者であり、エコール・ノルマルの学校付き司祭などをへてフランス・オラトリオ会の再建に尽力したのちに、一八七〇年、法王の無謬性を否認する書物で物議をかもすことになる、いわば進歩的なキリスト者であつた。彼はやがてガリレオに対する有罪宣告は教会の誤りであつた（だが「真の神学」の誤りではない）とするその主張を、教会の圧力によって否認させられるという屈辱を経験するわけ



だが、ではなぜ批判されるのは決して教権の典型的擁護者ではなく、この司祭でなくてはならないのだろうか。それはグラトリイによる科学と宗教の調停が、天体の運行に目的地を与えなおそうとするものだからである。

「いかなるものも、ただ動くために動くのではなく、どこかに到着するために動くのである」という聖トマス言葉を引きながら、グラトリイはだから天体の運行にも目的があり、したがって私たちの世界には終わりがあると主張するわけだが、これが無限と偶然とを前提とする『天体による永遠』の議論と真つ向から対立することはいうまでもない。ヴォルテールから取られた新聞タイトルが予想させるとおりの、あまり趣味がいいとはいえない皮肉ないまわしで、ブランキはまさにこの発想の愚かさを揶揄してみせる。

私としては、この惑星がいつどのようにして、どこかへ到着する気になったのか、一向にわからない。なにしろ地球の打ち明け話など、聞いたためしがないのだから。私が知っていることといえば、それは決して急ぐことがないし、奇妙なほど熱心に大回りして進むことにこだわっているという事実にすぎない。おそらくは物見高い連中をいらつかせるために大回りをしようというのだろう。憲兵にバスポート提示を要求させるすべがないのは実に残念だ。そうすればこの惑星の来し方行く末を知ることができるかもしれない<sup>(2)</sup>というのに。

この論理はすでに、数年後の『天体による永遠』冒頭部での態度決定を先取りしている。宇宙の全体を透明な姿で把握することなどできない以上、「不条理」か「理解不能」かのどちらかを選択する以外にないのであり、自分自身はきっぱり「理解不能」を選択するという命題がそれである。ブランキにおいて科学は、真実／真理を贈与することがなく、ただ事実を告げるばかりだ。一見科学による宗教批判に見える彼のグラトリイ批判は、たとえばフラマリオンなどのケースとは正反対に、科学と真実を結びつけることへの批判なのである。グラトリイの試みがいわゆる宗教以上にたちが悪いのは、それが「不条理」でも「理解不能」でもない視線によって宇宙を捉えることは可能であるという幻想を抱かせてしまうからであり、つまりはこの世界に意味／方向性があると思わせてしまうからだ。天体の運行にも革命にも、向かうべき目的地などありはしない。だからこそこの無限で平板な宇宙は、私たちの悲しいほどにささやかな自由が、いかなる根拠もない身振りの痕跡を残すことを許された、唯一のキャンバスとなるのである。

ブランキは歴史を取り消し、にもかかわらずユートピアという必然の王国に赴くこともない。ブランキのヴィジョンのなかで無限の反復でしかない私たち一人一人は、その反復の剰余として作り出されるノイズ、すなわち純粹な偶然を受け入れるための幸運な、あるいは不運な容器なのである。

## 註

- (1) Maurice Dommanget, *Blanqui, la guerre de 1870-71 et la Commune*, Editions Donat, Paris, 1947, p. 133-134. 以下の記述も主としてこの書物による。
- (2) オーギュスト・ブランキ『天体による永遠』浜本正文訳、雁思社、一九八五年、五〇―五一ページ。以後の引用はすべてこの邦訳によるが、訳文は文脈に合わせて変更した場合がある。
- (3) 同書、七三―七四ページ。
- (4) 同書、二九ページ。
- (5) 鈴木雅雄「シャルル・クロ、あるいは翻訳される身体」、『Ehudes Françaises』第四号、二〇〇七年三月、一三三―一五一ページ。
- (6) Camille Flammarion, « *L'Eternité par les astres* par A. Blanqui », *L'Opinion Nationale*, 25 mars 1872, p. 3.
- (7) Jacques Rancière, « Préface », in: Auguste Blanqui, *L'Eternité par les astres*, Les Impressions Nouvelles, 2002, p. 20.
- (8) ブランキ、前掲書、九五―九六ページ。
- (9) マイケル・J・クロウ『地球外生命論争 1750-1900』鼓澄治・山本啓二・吉田修訳、工作社、二〇〇一年、第九章「フランスにおける宗教的著作」を参照。
- (10) 同書、七二六ページ。
- (11) Théophile Ortolan, *Astronomie et théologie*, Dehonain et Brignot, 1894.
- (12) ヴァルター・ベンヤミン『パサージュ論Ⅴ』今村仁・三島憲一他訳、岩波書店、一九九五年、二八ページ。
- (13) 『パサージュ論Ⅰ』今村仁・三島憲一他訳、一九九三年、五五ページ。
- (14) 同書、五七ページ。
- (15) 『パサージュ論Ⅱ』今村仁・三島憲一他訳、一九九五年、二六二ページ。
- (16) Miguel Abensour, Valentin Pelosse, « Libérer l'enfermé », in: A. Blanqui, *L'Eternité par les astres*, op. cit. ただし私は「天体による永遠」の仮説が「反復」に関する仮説を極端にまで展開することによってそれを無効にしようためのシミュラクルであるとまで考えることはできない(ミゲル・アバンスール「メランコリーと革命のあいだに」守永直幹訳、『現代思想』総特集「ベンヤミン」一九九二年二月臨時増刊号、二〇三―二三三ページ。特に二二八ページを参照)。私たちの無数のコピーという仮説を本当に信じることである短絡性こそブランキの可能性であるというのが、この私の主張である。
- (17) Alain Pessin, *Le Mythe du peuple et la société française du XIX<sup>e</sup> siècle*, PUF (« Sociologie d'aujourd'hui »), 1992.
- (18) この点については次の論文で明快な整理がなされている。Michel Pigenet, « L'Adieu aux barricades. Du Blanquisme au Vaillantisme (décennies 1880 et 1990) », *La Barricade* sous la direction de Alain Corbin et Jean-Marie Mayeur, Publications de la Sorbonne, 1997, p. 367-379.
- (19) 見やすい例として次の論文を挙げておく。Philippe Régnier, « Place, fonctions et formes de l'écriture utopique chez Fourier », *Pamphlet, utopie, manifeste XIX<sup>e</sup>-XX<sup>e</sup> siècles*, textes réunis par Lise Dunasy et Chantal Massol, L'Harmattan, 2001, p. 385-401.
- (20) Serge Lehman, « La Physique des métaphores », *Europe*, octobre 2001, p. 49, n. 1.
- (21) Suzanet (Blanqui), « Le Père Graty. Science et foi. (3<sup>e</sup> article) », *Candida. Journal à Cinq centimes*, 1<sup>re</sup> année, n° 8, 27 mai 1865, p. 1.